

16世紀地中海世界におけるユダヤ教徒ネットワークと ユダヤ教徒医師

宮 武 志 郎

はじめに

オスマン朝におけるズィンミー、特にユダヤ教徒に関する研究は、1492年のユダヤ教徒追放令公布500年を機に、数多くの研究者によって幅広く進められてきた。その結果、オスマン朝においてユダヤ教徒コミュニティが果たした役割が、社会・経済史の面から次々と解明されるようになってきた。しかしながら、15・16世紀にユダヤ教徒コミュニティとオスマン朝宮廷の仲介役となっていたユダヤ教徒宮廷侍医やユダヤ教徒医師については、グロス [Gross 1908: 1-26; Gross 1909: 55-78]、ルイス [Lewis 1952: 550-563]、ヘイド [Heyd 1963: 152-170]、マーフィー [Murphy 2002: 61-74] などによる研究に限定されている。そこで本稿では、ユダヤ教徒医師がどのようにオスマン朝に到り、活動したのかについて、ユダヤ教徒のネットワークとの関連にも言及しながら、考察してみたい。

I オスマン朝宮廷におけるハモン一族

1492年にスペインで公布されたユダヤ教徒追放令以降、多くのユダヤ教徒がオスマン朝に流入してきた。それは西ヨーロッパでの宗教的非寛容性という否定的要因と、オスマン朝が専門的な経験と知識を持ったユダヤ教徒を暖かく迎えようという肯定的要因の二つが重なったからである [Murphy 2002: 63; 宮武 1991: 48-64]。特に、ギリシア・ローマの医学の伝統を継承、発展させてきたイベリア半島の医師の中に、多くのユダヤ教徒出身者を見いだすことができる。彼らの中からオスマン朝に避難、移住した者も決して少なくないことは容易に理解できよう。その中にハモン一族がいたのである。

ハモン一族はイベリア半島のナスル朝に使えていた宮廷侍医であった。1492年のユダヤ教徒追放令で、1493年頃にイスタンブルに移住したと考えられている。[Marcus 1972: 247 f.]。オスマン朝宮廷に最初に仕えていたとされるのが、ヨセフ=ハモン (d. c. 1518) である。彼はバヤズィット2世 (在位 1481-1512) とセリム1世 (在位 1512-20) に宮廷侍医として仕えていた。しかし、ヨセフ=ハモンに関しての情報はオスマン朝史料には見られず、

当時のユダヤ教徒やヨーロッパ側の史料に散見されるだけであるため、彼について詳細に知ることは困難である。しかし、彼の息子であるモシェ＝ハモン (c. 1490–d. c. 1554) については、オスマン朝史料にも見いだすことができる。彼はユダヤ教徒の宮廷侍医として、稀に見る権勢を誇っていた。モシェ＝ハモンがオスマン朝史料に初めて現れるのは1520年代後半とされている [Heyd 1963: 156 f.]。ヘイドによれば、モシェ＝ハモンが史料に登場する毎に彼への俸給は上昇し、同時に宮廷侍医全体でのユダヤ教徒の割合も高くなっていった。そして、1540年代末から1550年代初頭が、モシェ＝ハモンの絶頂期であるとヘイドは推定している [Heyd 1963: 157 f.]。モシェ＝ハモンの権勢を示す二つの出来事がある。一つめは、マラーノである大富豪の女性がヴェネツィアに滞在していた1550年前後に、ヴェネツィア当局によって自らの財産没収の恐れがあるとして、イスタンブルにいたであろう彼女のエージェントを通して、モシェ＝ハモンに接近、オスマン朝を動かすことを画策したのである。モシェ＝ハモンは時のスルタンであるスレイマン大帝 (在位 1520–66) を動かすことに成功し、スルタンからモシェ＝ハモンの親族の安全な通行権を要求する親書を得て、ヴェネツィアのドージェに送ったとされる [Heyd 1963: 159]。もちろん、この女性富豪はモシェ＝ハモンの親戚ではないが、ユダヤ教徒がオスマン朝宮廷を動かす方法としてしばしば利用する手段であった。なお、この富豪の女性は次章で述べるグラツィア＝ナスィである。モシェ＝ハモンの権勢を示す二つめの出来事は、オスマン朝で起こったユダヤ教徒による儀式殺人に関する事件である。1840年のダマスカスで起こった儀式殺人事件まで、オスマン朝ではユダヤ教徒による儀式殺人に関する記録は非常に少ない。ヘイドが見いだしたその数少ない史料の中から¹⁾、メフメット3世 (在位 1595–1603) が発したフェルマーンは特筆すべき内容が含まれていた。その内容とは、ユダヤ教徒の起こした儀式殺人に関する裁判は、地方のカーディーによって行われるのではなく、帝国の御前会議まで具申されねばならないというものであった。さらに、このフェルマーンはメフメット2世とスレイマン大帝の発したフェルマーンを踏襲するものであることが記されている。特に、スレイマン大帝のフェルマーンは1553年末から1554年初頭に発せられたものであり、またこの事件については当時のユダヤ教徒による四つのヘブライ語史料も取り上げていることから、ヘイドはモシェ＝ハモンがスレイマン大帝を動かしてこのフェルマーンを出させたものとしている [Heyd 1961: 147–149]。アマシアという地方で起こった殺人事件を御前会議にまで報告させるという

1) ヘイドは三つの儀式殺人の事件に関するフェルマーンを取り上げている。最初のフェルマーンは、1592年2月頃に発せられたフェルマーンである。内容は儀式殺人を行ったとされるユダヤ教徒8人をロードス島に送致するように、ブルサのカーディーに送ったものである。二つめのフェルマーンは不完全な形の草稿であり、恐らく最初のフェルマーンと同内容のものであるとしている (Mühimme Defteri, vol. 69, nos. 584, 585)。なお、最後のフェルマーンはメフメット3世が1602年3月に発したもので、大英博物館所蔵の写本である (Or. 9503, ff. 277 a–280 a)。

こと自体が異例であり、モシェ＝ハモンによるユダヤ教徒の救済を目的とした結果であると考えられる²⁾。モシェ＝ハモンがこのような行動を起こした理由として次のことが挙げられよう。1520年代後半にそれまでイスタンブルの世俗的指導者として、ユダヤ教徒コミュニティの権限を一挙に掌握していたシェアルティエルという人物が死去した。その結果、ユダヤ教徒コミュニティとオスマン朝とのパイプが細くなったため、彼の代役として宮廷内でスルタンに信頼されていたモシェ＝ハモンがユダヤ教徒の利害調整の役割を担ったものと考えられる [Epstein 1980: 65]。そのために、遠くアマシアから入ったユダヤ教徒が危機に直面しているという情報に対して、速やかに反応したのである。その証拠にユダヤ教徒の史料によれば、1540年代にサロニカのユダヤ教徒コミュニティ内部で対立抗争が起こったときに、その仲介のためにモシェ＝ハモンはオスマン朝の役人を派遣させた [Heyd 1963: 161]。すなわち、1540年代の絶頂期には、モシェ＝ハモンは首都イスタンブルにおけるユダヤ教徒コミュニティの事実上の世俗的指導者となっていたのである³⁾。

II オスマン朝宮廷とナスィー族

モシェ＝ハモンが死去したと推定される1554年頃には、イスタンブルに新しい著名なユダヤ教徒が登場していた。ナスィー族である。ナスィー族については、先行研究が数多く存在するため、詳しく述べることは避ける⁴⁾。ここでは、まずナスィー族がどのようなプロセスを経て、オスマン朝の都イスタンブルに移住したのかを考察したい。

ナスィー族の逃避行前は、ポルトガルのリスボンとフランドル地方のアントウェルペン、そしてロンドンの三都市を中心に、キリスト教徒名を持つマラーノとして活動していた。しかし、スペインと同様に、1536年以降ポルトガルでもマラーノに対する異端審問が強化さ

2) ヘイドはさらにこの事件の三ヶ月前に起こったスレイマン大帝の王子ムスタファ処刑事件との関係に言及し、アマシアの支配者であった王子ムスタファが反ユダヤ的行動をしていたことから、モシェ＝ハモンはスレイマン大帝の皇妃でムスタファのライバルであったヒュッレム＝スルタンと、彼女の義理の息子で大宰相のリュステム＝パシャと謀り、宮廷内の権力争いに参画したとしている [Heyd 1961: 146-149]。

3) 筆者は1540年代から1550年代前半に置いては、イスタンブルのユダヤ教徒コミュニティには、精神のおよび世俗的指導者は存在しなかったと記した [宮武 1997: 63]。しかし、モシェ＝ハモンのことを調査してみると、彼の存在は世俗的という意味では指導者と呼ぶべきものであると現在は考えている。

4) ナスィー族はポルトガル出身のマラーノの富豪として商業活動を行っていた。しかし、ユダヤ教信仰の嫌疑をかけられ、地中海各地に避難した後、最終的にオスマン朝の都イスタンブルに到り遍歴に終止符を打った。ナスィー族については、以下の文献が有効である。Roth 1947a; Roth 1948; Grunebaum-Ballin 1968; 宮武 1996; 宮武 1997。

れたために、リスボンからアントウェルペンに拠点を移した。その後、ハプスブルク朝当局がナスィー族の資産に注目、様々な圧力をかけてきたため、1545年頃ヴェネツィアに移住した。しかし、そのヴェネツィアでもナスィー族内での対立を機に、ヴェネツィア当局が資産差し押さえの措置に出ようとしたため、1540年代末にヴェネツィアを去ってフェッラーラに移った後、アンコーナ、ラグーザを経由して1553年頃にイスタンブルに到着したとされている〔宮武 1997: 66 f.; Roth 1947a: 85; Krekič 1997: 840〕。ナスィー族が最終の居住地としてイスタンブルを選んだのは、オスマン朝がユダヤ教徒難民を数多く受容している上に、すでに多くのスファラド系ユダヤ教徒がコミュニティーを作るほどに発展していたからである。そして、ナスィー族が行っていたこの逃避行の過程で、前述のようにヴェネツィア政府がナスィー族の出国の際に便宜を図るよう、オスマン朝からヴェネツィア政府に正式な依頼の書簡が送付されていた。これは宮廷侍医のモシェ＝ハモンがオスマン朝宮廷に働きかけたからであった。もちろん、モシェ＝ハモンとナスィー族はこれまで一度も会っていないはずであるが、東方貿易の拠点であるイスタンブルにナスィー族のエージェントが存在していたことは明白である。ナスィー族はそのエージェントを利用して、モシェ＝ハモンに自分たちの安全の保証を依頼したものと考えられる。ナスィー族は、イスタンブル到達以前に、自らのエージェントと宮廷侍医のモシェ＝ハモンを利用し、オスマン朝との接触に成功していたのである。

イスタンブルに移住してからのナスィー族による宮廷侍医への働きかけは、オスマン朝公文書にも残っている。次の表がナスィー族に関するオスマン朝の史料である。

表 オスマン朝公文書に残るナスィー族に関する記録

		Vol.	Page	No.	伝達者	日付	引用元	Page
1	Mühimme Defteri	3		1354		1560年7月17日	U. Heyd	p. 202 f.
2	Maliye Defteri		645	2775	配下の者	1565年12月11日	U. Heyd	p. 208 f.
3	Maliye Defteri		643	2775		1565年12月12日	U. Heyd	p. 206
4	Maliye Defteri		661	2775		1565年12月22日	U. Heyd	p. 206 f.
5	Maliye Defteri		1451	2775	配下の者	1566年4月13日	U. Heyd	p. 209 f.
6	Maliye Defteri		1241	2775	医者ダウード	1566年4月2日	U. Heyd	p. 204 f.
7	Maliye Defteri		1451	2775	配下の者	1566年5月31日	U. Heyd	p. 207 f.
8	Mühimme Defteri	7	174	763	ヨセフ・ナスィ	1567年11月24日	M. Safvet	p. 989
9	Mühimme Defteri	7	978	2726		1568年3月17日		
10	Mühimme Defteri	7	384	1102	医者ダヴィード	1568年3月20日		
11	Mühimme Defteri	7	550	1555		1568年6月13日		

引用は Heyd 1966 と Safvet 1328 を示す

この資料から判断すると、ナスィー族がオスマン朝宮廷と積極的に接触するようになったのは1560年からである。ナスィー族がイスタンブルに到着したのが1553年頃でありその後の数年間でオスマン朝宮廷に接近したのである。そして宮廷に接近するための最も容易かつ効果的な手段は、ユダヤ教徒の宮廷侍医を利用することであった。しかし、1540年代に宮

廷内で権勢を誇っていたモシェ＝ハモンは、1550年代になるとかつての勢いを失い始め、1554年頃に死去したとされている。そのため、ナスィー族は他のユダヤ教徒宮廷侍医を利用したと考えるのが妥当であろう。モシェ＝ハモンの息子でやはり宮廷侍医となっていたヨセフ＝ハモンの名は、オスマン朝史料に登場してこない。しかし上記表中の6と10の史料にはダワード、またはダヴィードという名の医師が現れている。この医師は、スレイマン大帝時代からの宮廷侍医であったタム＝ベン＝ダヴィード＝ヤフヤであろうと推定される [Galante 1938: 86]。

このようにして、ナスィー族はオスマン朝宮廷への接触に成功したのであるが、それはナスィー族がもたらす富だけでなく、彼らが地中海世界さらにはヨーロッパ全域で行っていた商業活動によって得られる情報ネットワークの存在をオスマン朝宮廷が高く評価したからに他ならない。では、ナスィー族はその情報ネットワークをどのように形成したのであろうか。その解明のためにナスィー族と同じようにヨーロッパ各地を移動したアマトゥス＝ルスィタヌスという一人のマラーノ医師の足跡を調べてみることにする。

Ⅲ アマトゥス＝ルスィタヌスの遍歴

まず、アマトゥス＝ルスィタヌスの生涯を簡単に紹介する。アマトゥス＝ルスィタヌスは1511年ポルトガルのカステロ＝ブランコという町で、コンヴェルソの両親の下に生まれた。両親はユダヤ教徒からキリスト教に改宗したコンヴェルソではあるが、ユダヤ教信仰を保持するマラーノであった。彼はスペインの名門であるサラマンカ大学で学んだ後、極めて数奇な運命をたどる。医者として過ごしたスペインと故郷ポルトガルでは、マラーノに対する環境が極めて悪化していた。ポルトガルでも1536年には教皇パウルス3世によって異端審問の強化が要請されたため、多くのマラーノが国外に逃亡した。ルスィタヌスもハプスブルク家領であったアントウェルペンに逃れた。当時、アントウェルペンは商業の発展を図るため、宗教的に寛容であり多くのユダヤ教徒やマラーノも集まるヨーロッパ随一の商業都市であったこともあり、ルスィタヌスはこの地に約7年間滞在した。1540年には、イタリアのフェッラーラ公国のエルコレ2世により招待され、フェッラーラに移住したが、その7年後の1547年にはイタリアにあるローマ教皇領であったアンコーナに移住した。1555年にマラーノを迫害したアンコーナ事件に遭遇し、ようやく難を逃れウルビーノ公デッラ＝ロヴェーレ家支配下のペーザロへ移動した。しかし、数ヶ月後にはアドリア海の自治都市共和国ラグーザに移住し約2年ほど滞在した後、オスマン朝のサロニカに移住し1568年にその地で人生の幕を下ろした。これを年表にまとめると以下のようになる。

表 アマトゥスニルスィタヌスの生涯

1511 年	ポルトガルで生れる
1530 年頃	スペインのサラマンカ大学で学位取得
1533 年	アントウェルペンに移住
1540 年	フェッラーラ滞在
1547 年～ 1555 年	アンコーナ滞在 1550 年ローマ訪問 1551 年フィレンツェ訪問
1555 年～ 1556 年	ペーザロ滞在
1556 年～ 1558 年	ラグーザ滞在
1558 年頃	サロニカに移住
1568 年	サロニカにて死去

また、彼の生誕地と滞在先を地図上で確認すると次のようになる。

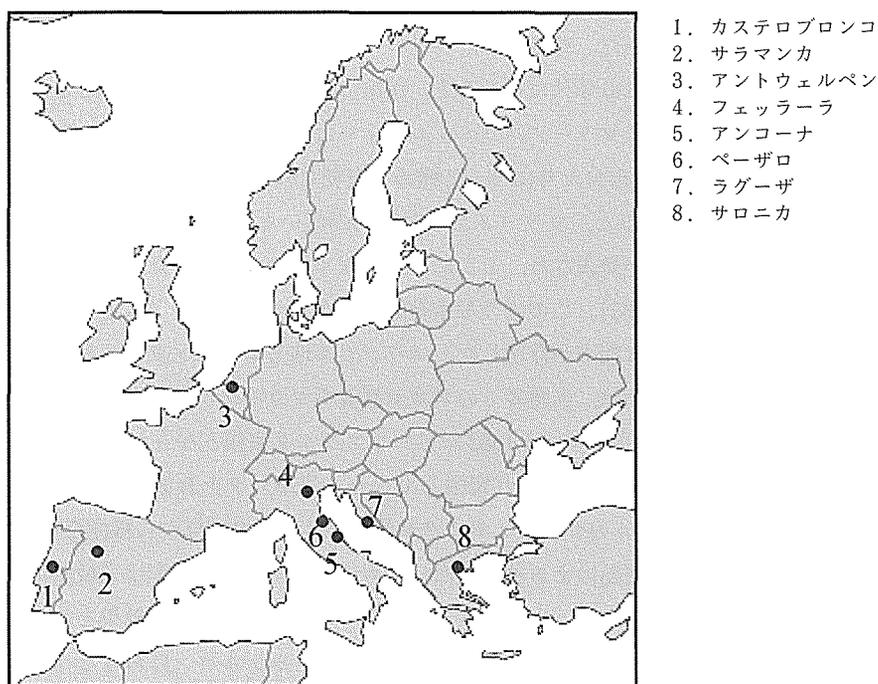


図 アマトゥスニルスィタヌスの滞在地

この遍歴の過程を見ると、以下の二点が特徴として挙げられよう。まず第一に、死去したサロニカを除き、サラマンカ大学での学位取得以降、ルスィタヌスが10年以上同じ場所に居住し続けたことはなかったことである。それはルスィタヌスがマラーノであるがために、常に異端審問を含む宗教的迫害を受ける状況におかれていたことを意味する。第二に、ルスィタヌスが教皇を含む各地の権力者に招聘されている事実を見ると、彼の医学者としての優秀さである。

ここで、第一点についてルシタヌスが次々と移住せざるを得なかった状況を検討してみたい。ルシタヌスがスペインのサラマンカ大学で学位を取得した後、1533年にスペインを離れたのは、当時多くのマラーノと同じようにスペインでの異端審問を恐れていたからに他ならない。スペインでは1516年に、ハプスブルク家のカルロス1世（神聖ローマ帝国皇帝カール5世）が王位に就任し、ハプスブルク朝が成立した。カルロス1世は基本的に従来からのユダヤ教徒に対する政策を変更することなく、そのまま異端審問所は機能し続けていたのである。また、ルシタヌスの故郷であるポルトガルにおいても、前述のように1536年にスペインを範とした異端審問制度が導入されるなど、イベリア半島においてマラーノが居住することが次第に困難になって来ていたのである。もともとポルトガルもスペインと同じように1497年にユダヤ教徒追放令が発布された結果、多くのユダヤ教徒が表面的にはキリスト教に改宗した。しかし実際には、彼らに対して異端審問が開かれることなく、マラーノはあくまで世俗の裁判所によってのみ裁かれるのであり、宗教による迫害を避ける保証を国王マヌエル1世から獲得していた。そのため、マラーノは以前と変わらない生活を送ることができたのである。しかし、1530年代にはいと、次第に異端審問所の開設を求める声が大きくなったため、ポルトガルのマラーノ＝コミュニティはローマ教皇に積極的に働きに出て、一時はクレメンス7世から自分たちにとって極めて有利な教書を獲得した。しかし、1534年にクレメンス7世が死去すると、マラーノたちの努力のいかにもなく1536年ポルトガルに異端審問所設置を認める教書が発表され、ここにポルトガルでのマラーノたちの運命は決定したのである [Roth 1972: 1385]。このような宗教的迫害が多くのマラーノに迫っていた中で、彼らにとって非常に自由な都市が存在した。フランドル地方のアントウェルペンである。

アントウェルペンに移ったのは、当時多くのユダヤ教徒やマラーノがこの地に利点を見いだしたからである。アントウェルペンは1482年にハプスブルク家領となったが、ヨーロッパの交易の中心地として多くの商人が訪れ繁栄していた。元来ユダヤ教徒の住民は少数であったが、16世紀になって多くのマラーノやユダヤ教徒がイベリア半島から移住を開始し、コミュニティも生まれた。交易による利益確保のために、ハプスブルク家は宗教的には基本的に寛容な政策を実施したことも、さらに多くのマラーノたちを招き呼ぶ結果となった。具体的には、1526年3月30日付で、皇帝カール5世はアントウェルペンにおける「ポルトガル人の新キリスト教徒（コンヴェルソのこと。ポルトガルではコンヴェルソのことを新キリスト教徒と呼んだ）」に安全通行権を与えたほどであった [Scwarzfuchs 1972: 167 f.]。それほどにマラーノの経済的存在は大きかったのである。ルシタヌスは自らの故郷であるポルトガル、そして医学を学んだスペインを離れ、この自由で身分の保障されたアントウェルペンに移住したのは当然のことであろう。彼はこの都市に約7年滞在することになった。

しかし、この安全であったはずのアントウェルペンでも次第にマラーノに対する風当たりが強くなり始める。アントウェルペンはスペインというカトリック教国の支配地であるにもかかわらず、異端審問は実施されず、またそれを国家が例外的に認めていたということに對

して、不満を持つカトリック勢力が増加してきた。さらに、この当時激化していた宗教改革の争いで、マラーノは新教側を支援しているというようなまことしやかな噂もカトリック勢力の神経を逆なでしていた。そして、ポルトガルやスペインから避難してきたマラーノは、このアントウェルペンを經由してイスラーム世界を含む様々な地へ逃れていくケースが多かった。これらの様々な要素が絡み合いながら、次第に反マラーノの動きとして表面化し、1550年、ついにアントウェルペンにいるすべてのマラーノが追放されることになった [Scwarzfuchs 1972: 167; Roth 1947b: 236-239]。ルスィタヌスがアントウェルペンを離れたのは1540年であるから、まだ反マラーノの運動が本格的に活発化する時期ではなかった。恐らく彼が安全と考えられていたアントウェルペンを離れたのは、フェッラーラ公国エステ家のエルコレ2世（在位1534～1559年）が、フェッラーラ大学の医学教師としてルスィタヌスを招待したことに呼応したのであらうと考えられる。このフェッラーラという都市も宗教的にも科学の研究にも自由であり、マラーノやユダヤ教徒にとって快適なところであった。権力者であったエステ家は伝統的に各地で迫害されたユダヤ教徒を厚遇してきており、さらにエルコレ2世は1524年と1538年にマラーノに対しても優遇する政策を認めていた [Carlebach 1972: 1231 f.]。このような環境であったために、ルスィタヌスはこの地に移住したと考えられる。ここで彼は、様々な医学研究の成果を上げた。しかし、7年後にルスィタヌスは安全な地を捨てて教皇領にあった港町アンコーナに移り住むことになった。アンコーナは1532年に教皇領に入ると、教皇は交易による利益を重視しようとした。特に、1537年から1540年に起こったヴェネツィアとオスマン朝との戦争によって、ヴェネツィアのレヴァント貿易は大きなダメージを蒙った [宮武 1997: 65 f.]。この機会を利用しヴェネツィアを乗り越える貿易拠点としてのアンコーナに着目したのである。教皇パウルス3世（在位1534～1549）は多くの商人たちを呼び寄せようとし、宗教に関わりなくアンコーナでの居住を許可した。これは明らかにユダヤ教徒あるいはマラーノを意識したものであり、その結果はアンコーナに経済的繁栄をもたらした。具体例を挙げてみる。当時アンコーナの貿易取扱品の中心は北欧、特にアントウェルペン経由のイギリス製の毛織物であった。1543年から45年のアントウェルペンにおけるイギリス毛織物の50%がドイツ向け、41.5%がイタリア向けであった。そしてさらにイタリア向け貨物は、一つはヴェネツィア、二つにはアンコーナの二港を中心に集荷され、そのイタリア方面向けの物価全体総額のうちヴェネツィアが11.5%、アンコーナが76.8%という圧倒的比重を占めていたのである [越智 1969: 128 f.]。1547年には、パウルス3世はマラーノを異端審問の対象とはしないという約束で彼らをアンコーナに呼び寄せようとした⁵⁾。1547年とはまさにルスィタヌスがアンコーナに到達

5) [Milano 1972: 941 f.; Roth 1947a: 134-139]。また、教皇パウルス3世とユリウス3世によるユダヤ教徒とマラーノ誘致に関する一次史料としては次が有効である [Simonsohn 1985: 234-267]。

した年である。教皇パウルス3世が死去し、その後継者となったユリウス3世（在位1550～1555）もユダヤ教徒やマラーノに対して寛大な政策を採用していたため、ルスィタヌスはアンコーナを中心にかなり自由な活動を行うことが可能であった。1550年にはローマ、1551年にはフィレンツェを訪れている。また、このアンコーナ滞在中に教皇ユリウス3世の妹の治療も行っていた。しかし、このような安定した生活もユリウス3世の二代後のパウルス4世が教皇位に就任すると、状況は一変する。アンコーナ事件の勃発である。

教皇パウルス4世（在位1555～1559）は、枢機卿の時代から反宗教改革を積極的に推進しており、その敵意は特にユダヤ教徒とマラーノに向けられていた。その彼が教皇位に就任した年の7月には教書を発表し、ローマでゲットーを完成させ、ユダヤ教徒の経済活動を制限し、ユダヤ教徒とキリスト教徒との契約の締結を禁止するなど、教皇領内でのユダヤ教徒の活動を極端なまでに封じ込めようとしたのである[Roth 1947a: 139; Grayzel 1972: 1496]。ところで、当時アンコーナにいたユダヤ教徒は大きく分けて以下の人々から構成されていた。イタリアの他の地域から移住してきた者、イベリア半島から移住してきた者、そしてサロニカなどのオスマン朝領を経由することにより、オスマン朝臣民の地位を獲得し、身の安全を保証されたメルカンテ＝レヴァンティーノ（Mercante Levantino レヴァント商人）と呼ばれる者である。前二者のユダヤ教徒は1532年にアンコーナが教皇領になって以来、異教徒ではあるが教皇に経済的利益をもたらした存在であった。そのため、彼らは教皇領内ではキリスト教徒との区分が明白であったが故に、彼らをキリスト教徒社会から隔離さえすれば良かったのである。また、最後のメルカンテ＝レヴァンティーノはオスマン朝のズィンミー（被保護民）であり、オスマン朝との相互協定により、教皇は彼らの身分を保証する義務があった。しかしながら、キリスト教徒名を持つマラーノは、キリスト教徒社会からの隔離も困難であり、また、オスマン朝領を経由して移住してきたわけでもないため、彼らに対する保護の義務は教皇にはなかったのである。その結果、1556年教皇パウルス4世は約100名のマラーノを捕らえて異端審問にかけ、そして24名を焚刑に処した。これがアンコーナ事件である[宮武 1995: 50]。ルスィタヌスはこの事件が起こったとき、まさにアンコーナに定住していたのである。そのために、ルスィタヌスはマラーノであるとの嫌疑をかけられて、自らの全財産を没収されたとされる⁶⁾。しかし、他の多くのマラーノと同じように何とか逃げ延びて命だけは助かっている。彼の友人でマラーノである医師が、多くの人々に治療を施したという理由で人々に救われたことから、ルスィタヌスも同様な理由で救われたことも考えられる[Roth 1947a: 146]。そして、ルスィタヌスが避難した先は、ウルビーノ公グイドバルド2世が交易港として発展させようとしていたペーザロであった。グイドバルド2世が

6) [Roth 1947a: 146]。また、ルスィタヌスの弟と思われる人物の財産没収記録に関する史料が存在する[Sage 1985: 169 f.]。

アンコーナから逃れてきたマラーノを受け容れたのは、マラーノの経済力に着目したからに他ならない [Saperstein 1981: 222; 宮武 1995: 52]。しかしながら、ルスィタヌスにとってペーザロはあくまで一時的な避難所であつたらしく、わずか数ヶ月でラグーザに移住した。ラグーザは1442年以來、オスマン朝の貢納国となっていたが、自治都市共和国の地位は保存しており、レヴァント貿易の拠点の一つとして経済的繁栄を謳歌していた。また、イスパニアによるユダヤ教徒追放令以降は、ユダヤ教徒やマラーノがオスマン朝領内に避難するためのゲートの一つでもあった。ルスィタヌスにとってこのラグーザは未知の都市ではなく、フェッラーラ滞在中にラグーザ政府の招待で、ラグーザを訪れたこともある [Leibowitz 1972: 796]。また、ラグーザ政府から市の医師になつてもらいたい旨の申し込みもあった [Harris 2003: 200 f.; Friedenwald 1944: 338]。このような経緯もあり、ルスィタヌスはラグーザに約2年間滞在した。しかし、ラグーザ政府からの好意が寄せられたにもかかわらず、ルスィタヌスは1558年頃にラグーザを発ちサロニカに向かった。多くのユダヤ教徒やマラーノがラグーザを経由してオスマン朝に向かっていたように、ラグーザはあくまで中継地点であつて、ユダヤ教徒やマラーノが数多く居住する都市ではなかったからであろう。そしてサロニカはイスタンブルと並ぶ巨大な規模のユダヤ教徒コミュニティを持つ都市であつた。その後10年の間、彼は異端審問を恐れることもなく、静かにサロニカで過ごし、1568年にペストで波乱の幕を閉じることとなった。彼の遍歴はまさに当時のマラーノやユダヤ教徒が直面していた状況の典型であると言っても良いだろう。

IV ナスィー族によるネットワークの形成

医師として名声を獲得したルスィタヌスであるが、彼はマラーノであるが故に常に異端審問と隣り合わせの生活を送っていた。そのために、ルスィタヌスは数多くの地を移動せねばならなかったが、その困難な中で彼は多くの貴重な医学書を残した。それらの著作の中には、誰を治療したかなどの歴史的史料としての価値を持つものもある。また、彼の医師としての名声は非常に高かったため、彼がいつ頃どの都市に滞在したかを明らかにする史料が各地に残っている。その結果、ルスィタヌスの移動の跡は他のマラーノと比べると、比較的容易に追うことができる。すると、ルスィタヌスが辿ったルートは、ナスィー族の逃避ルートと重複する部分が多いことに気づく。これは単なる偶然の一致ではなく、ナスィー族が同じマラーノのルスィタヌスを救出すべく導いた結果だと考えられる。もちろん、それはナスィー族とルスィタヌスの間に面識があるのが前提であろう。その記録をルスィタヌスが残している。1530年代にアントウェルペン滞在中に、ルスィタヌスがグラツィアを治療したのである [Friedenwald 1944: 390]。しかし、たとえ面識がなくても、ナスィー族は逃避を続ける数多くのマラーノを次々と救っている例が見られる。次の表はマラーノの中でも、著名な人々が各地を移動した記録をまとめたものである。

表 16 世紀マラーノ移動地比較

	ナスィー族	ルスィタヌス	ピレス	ロドリゲス	マヌエル
リスボン（その他ポルトガル）	○	○	○	○	○
サラマンカ		○	○		
ロンドン※	○		○	○	○
アントウェルペン※	○	○	○	○	○
ヴェネツィア※	○		○		○
フェッラーラ※	○	○	○	○	
アンコーナ※	○	○	○		
ペーザロ※		○			
ラゲーザ※	○	○	○		○
イスタンブル（サロニカ）	○	○			○

※がついている都市はナスィー族のエージェントが存在していたことを示す。

Tucker 1998; Friedenwald 1944; Heyd 1964; Roth 1972 などを利用して作成。

表中の人物はすべてポルトガル系マラーノである。ピレスとは、ディオゴ＝ピレス (Diogo Pires または Didacus Pyrrhus Lusitanus 1517-1599) という人物で、詩人として多くの作品を残している。ルスィタヌスと友人であり、彼と同様に各地を流浪し、最終的にはラゲーザで生涯を終えた。[Editorial Staff 1972: 1415]。また、彼はルスィタヌスの死去に際し、墓碑銘にルスィタヌスへの追悼詩を刻んでいる [Tucker 1998: 93]。ロドリゲスとは、ディオニシウス＝ロドリゲス (Dionysius Rodrigues d. 1541) という人物で、ポルトガル王室の宮廷侍医であったがリスボンを離れロンドン、アントウェルペンを経由した後、フェッラーラで死去した。彼は移動途上のアントウェルペンでルスィタヌスと会見したとされる [Friedenwald 1944: 463 f.]。最後のマヌエルは、ロドリゲスの息子でマヌエル＝ブルードという医師である。彼は父と共に各地を移動するが、最終的にはイスタンブルかサロニカに定住した。父と同じく、その途上のアントウェルペンでルスィタヌスと会っている。そして、オスマン朝に到着した後に、スルタンに献上するために “Asa-i piran (老人の杖)” という医学の手引き書を記したとされる [Heyd 1964: 48-53; Roth 1972: 1414 f.]。

このように、マラーノであった彼らの逃避行ルートが一致ないし重複していること、そして彼らの通過した都市のほとんどにナスィー族のエージェントが存在していた事実は、彼らがナスィー族の形成した商業ネットワークに乗っていたことを示すべきものであろう。そして、上記のような著名な人物だけでなく、より多くのマラーノもこのルートを利用していた。しかし、彼らすべてがオスマン朝領内を目指していたわけではない。驚くべきことに、そのルートを利用していたマラーノがそのままナスィー族のエージェントとして、各都市に留まって商業活動に従事する者も現れている。たとえば、前述のディオゴ＝ピレスの親族は、キリスト教徒名を名乗ってイベリア半島に帰国している [Tucker 1998: 104]。換言すれば、ナスィー族は多くのマラーノを自らの商業ネットワークを利用して救うと同時に、さらに彼らを自らのエージェントとし商業ネットワークの拡充に成功したのである。もちろん、ル

スィタヌスや他の多くの医師の間に形成された、商業とは直接関係のない医学の分野でのネットワークも生まれている。これらの医師の中にはルスィタヌスのように、ヨーロッパ諸国の宮廷事情にも詳しい者も決して少なくはなかった。すなわち、ナスィー族の商業ネットワークは同時に、オスマン朝宮廷にとって、重要な価値を持つ情報ネットワークにもなっていたのである。

むすびにかえて

ハモン一族はユダヤ教徒宮廷侍医として、オスマン朝宮廷内に深く関わりを持った。さらに、ナスィー族はユダヤ教徒宮廷侍医を利用してオスマン朝宮廷に接触することに成功した。同時に、ナスィー族は多くのマラーノを救うために、自らの商業ネットワークを利用したが、その際に多くのマラーノをも自らのエージェントとして利用したのである。その結果、ヨーロッパ各地に滞在するエージェントからの情報は、ナスィー族を通してオスマン朝宮廷へとつながる情報ネットワークとして大きく拡充することになったのである。

政治との関わり合いを避け、純粋に医学を究めようとしたアマトゥス＝ルスィタヌスを調べていくうちに、ナスィー族の商人としての着実な勢力拡大の様子が見えてきた。しかしながら、ナスィー族の手法は冷酷なまでに優れていただけでなく、多くのマラーノやユダヤ教徒を救ったことも事実であった。最後に、ナスィー族当主グラツィアの業績をたたえた16世紀ポルトガルのマラーノ文筆家であったサムエル＝ウシュクの一文を記しておく。

非常に著名な女性 ドーニャ＝グラツィア＝ナスィに捧ぐ

人間の最も高貴で重要な機関として、心は重んじられています。なぜなら、体を感じるいかなる部分の痛みも心は最初に感じてくれるからです。実際、すべての者が安心していることに心は満足されているに違いありません。

私の主な目的は新しい果実をつけたこの小さな枝と共に我々ポルトガル国民（ユダヤ教徒やマラーノのこと－訳者註）に仕えることであるため、この小さな枝をあなた様に差し上げることは適切でありましょう。なぜなら、あなた様は我々（ユダヤ教徒やマラーノ－訳者註）という体の中にある心だからです。（…中略…）

あなた様が光を当て始めてくれたおかげで、我々の乳飲み子でさえ母親の胸でこの事実を知ったのです。そしてあなた様の名と善行の記憶が人々の体の骨の中に永遠に刻み込まれることになるでしょう。（…中略…）

神があなた様の生命と財産、そしてお嬢様の生命と財産をこれからもずっと守り、栄えさせ給わんことを。

サムエル＝ウシュク [Usque 1553: 37]

参 考 文 献

EJ: *Encyclopaedia Judaica*.

EI: *Eretz Israel*.

JSS: *Jewish Social Studies*.

MI: *Michael*.

Or: *Oriens*.

REJ: *Revue des Études Juives*.

SF: *Sefunot*.

TOEM: *Tarih-i Osmani Encumeni Mecmuası*.

Carlebach A. (1972) Ferrara, *EJ*, vol. 6, 1231 f.

Editorial Staff (1972) Pyrrhus, Didacus, *EJ*, vol. 13, 1248 f.

Epstein, M. A. (1980) *The Ottoman Jewish Communities and their Role in the Fifteenth and Sixteenth Centuries*, Freiburg.

Friedenwald, H. (1944) *The Jews and Medicine*, KTV Publishing House, New York, 2 vols. (1967 rep ed).

Galante, A. (1938) *Medicine Juifs au Service de la Turquie, Histoire des Juifs de Turquie*, 9, İstanbul, 77 – 117 (1985 rep ed).

Grayzel, S. (1972) Bulls, Papal, *EJ*, vol. 4, 1494 – 1497.

Gross, H. (1908) La Famille Juives des Hamon, *REJ*, Tome 56, 1 – 26.

Gross, H. (1909) כתבים םהשר כמו"הר משה המון ז"ל (La Famille Juives des Hamon), *REJ*, Tome 57, 55 – 78.

Grunebaum-Ballin P. (1968) *Joseph Naci duc de Naxos*, Paris.

Harris R. (2003) *Dubrovnik, A History*, London.

Heyd, U. (1961) עלילות דם בתרכיה במאות הט"ז והט"ז (Ritual Murder Accusations in 15th and 16th Century Turkey), *SF*, vol. 5, 136 – 149.

Heyd, U. (1963) Moses Hamon, Chief Jewish Physician to Sultan Suleyman the Magnificent, *Or* 16, 152 – 170.

Heyd U. (1964) An Unknown Turkish Treatise by a Jewish Physician Under Süleyman the Magnificent, *EI* 7, 48 – 53.

Heyd U. (1966) תעודות תורכיות על בנינה של טבריה במאה הט"ז (Turkish Documents on the Rebuilding of Tiberias in the Sixteenth Century), *SF*, 10, 198 – 210.

Krekič, B. (1997) Gli ebrei a Ragusa nel Cinquecento, *Dubrovnik: a Mediterranean Urban Society, 1300-1600*, Variorum, Hampshire & Vermont.

Leibowitz J. O. (1972) Amatus Lusitanus, *EJ*, vol. 2, 795 – 798.

Lewis B. (1952) The Privilege Granted by Mehmed II to his Physician, *BSOAS* 14 (3), 550 –

563.

- Marcus, S. (1972) Hamon, *EJ*, vol. 7, 1248 f.
- Milano A. (1972) Ancona, *EJ*, vol. 2, 941 f.
- Murphy, R. (2002) Jewish Contribution to Ottoman Medicine, 1450 – 1800. In: Avigdor Levy (eds.), *Jews, Turks, Ottomans*, Syracuse University Press, New York, 61 – 74.
- Roth C. (1947a) *The House of Nasi, Doña Gracia*, New York.
- Roth C. (1947b) *A History of the Marranos*, Philadelphia.
- Roth C. (1948) *The House of Nasi*, The Duke of Naxos, New York.
- Roth, C. (1972) Brudo, Manuel, *EJ*, vol. 4, 1414 f.
- Safvet M. (1328 A. H.) Yasef Nasi, *TOEM* 16, 982 – 993.
- Sage R. (1985) Nuovi Documenti Sui Marrani D'Ancona (1555 – 1559), *MI*, 9, 130 – 233.
- Saperstein M. (1981) Martyrs, Merchants and Rabbis: Jewish Communal Conflict as Reflected in the Responsa on the Boycot of Ancona, *JSS* 43, 215 – 228.
- Swarzfuchs S. R (1972) Antwerp, *EJ*, vol. 3, 167 f.
- Simonsohn S. (1985) Marranos in Ancona under Papal Protection, *MI* 9, 234 – 267.
- Tucker, G. H. (1998) To Louvain and Antwerp, and Beyond: The Contrasting Itineraries of Diogo Pires (Didacus Pyrrhus Lusitanus, 1517 – 99) and João Rodrigues de Castelo Branco (Amatus Lusitanusu, 1511 – 68). In: Luc Dequeker & Werner Verbeke (eds.), *The Expulsion of the Jews and their Emigration to the Southern Low Countries (15th–16th C.)*, Leuven University Press, Leuven, 83 – 113.
- Usque S. (1553) *Consolation for the Tribulations of Israel*, tr. Cohen M. A., Philadelphia, 1965.
- 越智武臣 (1969) ヨーロッパ経済の変動『岩波講座世界歴史』岩波書店, 14, 107 – 172.
- 宮武志郎 (1991) 15・16世紀オスマン海軍による火器技術の導入『オリエント』34-1, 48 – 64.
- 宮武志郎 (1995) 16世紀オスマン朝宮廷とユダヤ教徒『私学研修』137, 119 – 133.
- 宮武志郎 (1996) ヨセフ・ナスィ『オリエント』39-1, 149 – 165.
- 宮武志郎 (1997) 16世紀地中海世界におけるマラーノの足跡——ドナ＝グラツィア＝ナスィ『地中海学研究』20, 51 – 80.

(普連土学園)